

生命の（反）ユートピア

—— オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』を読む ——

奥村大介

研究室紀要 第41号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2015年7月

生命の(反)ユートピア

——オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』を読む——

奥村大介

ああ、不思議なこと！

素敵なたちがこんなに！

人間はなんて美しいのでしょう！ ああ、素晴らしい新世界、
こんな人々が住んでいるのですもの！

(シェイクスピア『嵐』)¹⁾

1 はじめに——非在の場所のゆくえ

二十世紀英国の作家オルダス・ハックスリー (Aldous Leonard Huxley, 1894-1963) には、『すばらしい新世界』(Brave New World, 1932)²⁾という、科学技術の高度に発達した未来社会を描いたユートピア物語がある。本稿は、この小説に科学思想史・文化史的な註釈を施しつつ、哲学的生命論の観点から、一つの読みを示そうとするものである。

『すばらしい新世界』作中の年代は自動車王ヘンリー・フォード (Henry Ford, 1863-1947) の生誕を記念する「フォード紀元」によって記される。フォードの生年は一八六三年であることから、この小説の物語現在は西暦二五〇〇年頃ということになる。この物語の世界でフォードは神格化されており、十字架は上部を切り落とされT字架となっている (ヘンリー・フォード存命中の代表車種〈T型フォード〉に由来)。この未来社会では、現在の国々は消滅し、全世界が一つの「世界国家」になっており、十人の世界総統がこれを統治している。この世界では母親が子供を出産するという事は原則として行なわれない。子供は人工授精によって生まれガラス壺の中で育成される。すなわち人間はすべて「体外発生 (ectogenesis)」で生まれるのである³⁾。壺のなかの栄養状態を変化させたり化学物質を添加したりする操作により知能や体格の異なる子供をつくりだし、エリートであるアルファから最下層のエプシロンまで五つの階級にわけられる (この階級のなかにアルファ・プラスなどの小分類がある)。胎生でなくなっ

た人間の間に親子関係は存在しない。そのため、家族という概念は消滅している。家庭をつくるための結婚とか恋愛といったものもなくなり、セックスはスポーツのように楽しむものとなっている。産まれた子供は条件反射と睡眠時学習によって教育される⁴⁾。社会には苦しみがほとんど存在しないが、なにかの偶然でもし苦悩が生じたらソーマ (soma) とよばれる向精神薬を服用することで解消する。およそ、このような社会である。一言で言うなら、管理社会の究極的な姿ということになろう。物語の中心人物は、アルファ階級に属するバーナード・マルクス (Bernard Marx) や同じくレニーナ・クラウン (Lenina Crowne) ら公職につくものたち (何という皮肉な固有名詞だろう)⁵⁾、世界総統ムスタファ・モンド (Mustapha Mond)、そしてこの新世界に疑問を抱き反逆する「野蠻人 (Savage)」と呼ばれる青年である。彼は偶然——例外的に——胎生で誕生した。他の人間がみな体外受精で生まれるのに対してサヴェッジが唯一胎生で生まれたという記述には、彼がイエス・キリストの鏡像であるという含みが感じられる。普通の人間が男女の交合によって生まれるのに対してイエスただ一人が処女懐胎で生まれたという伝説のちょうど裏返しだがサヴェッジ誕生の経緯である。

この小説はディストピア (dystopia)、つまり反ユートピアの物語と位置づけられることが多い。だが、筆者は冒頭でこの作品を「ユートピア物語」と呼んだ。ユートピア (utopia) という語はギリシャ語の ou (非) と topos (場所) の合成語であり、「非在の場所」の意味であるが、ほぼ同音のギリシャ語

eu (よい) が倍音的に響いて、「よき場所」という含みも感じられる。ここで指摘しておきたいのは、古来、ユートピア物語の古典と呼ばれる作品には、実際に通読してみると、ユートピアという言葉が普通の意味であたえる理想郷とか理想国といった印象とはかけ離れた設定が描かれている場合が多いということである。おそらく史上最古のユートピア物語であるプラトン (Platon, 424-347bc) の『^{ポリテイア}国家』篇や、まさに「ユートピア」という言葉の起源であるトマス・モア (Thomas More, 1478-1535) の『共和国の最善の州とユートピア新島についての真に黄金な、そして愉快である上に有益な小著』 (*Libellus vere aureus, nec minus salutaris quam festivus, de optimo rei publicae statu deque nova insula Utopia*, 1516. 通称『ユートピア』) に描かれるユートピア (utopia, eutopia) には、今日で言えば優生学 (eugenics) や安楽死 (euthanasia) に相当するような危うげな思想が明確に現れている。東洋の桃源郷 (陶淵明『桃花源記』) とか、ヨーロッパならアルカディアのような、牧歌的な理想郷⁹⁾が描かれたユートピア文学で著名な作品といえ、事実上、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) の『ユートピアだより』 (*News from Nowhere*, 1890) のほかにはほとんどないと言っても過言でないほどである。

さて、この「すばらしい新世界」は、非在の場所であることはいうまでもないが、同時に、その創設を望んだ人々にとっては文字どおりの「すばらしい」場所である。だが、われわれにとって、この「すばらしい (Brave)」という形容詞はイロニックに響く。この世界はどうみても管理社会の極致であり、おぞましい科学的コントロールが汎在した世界だ。だが「すばらしい」という形容詞はほんとうにイロニーなのか。本稿はこの形容詞の意味の検討のために費やされるといってもよい。この作品を、可能な未来社会の悲観的な先取りであるとみなし、科学技術⁷⁾の過度な発展への警告として発揮された作家の想像力の暗鬱な結実として読むこともできるだろう。だが、いわゆる〈技術の暴走〉のテーマを見出すだけでは、このテキストの奥行きが十分に踏破されたとは言えない。われわれはこの暗く救いのない物語を、その執筆時⁸⁾において、すでに成熟を遂げていた近代社会の姿が拡大投影されたものであり、ポスト近代とも呼ばれる今日の社会を暗示したものと読むべきで

ある。T字架の由来であるT型フォードは自動車が大衆的に普及するきっかけとなった歴史的なモデルで一九〇九年に発売されている⁹⁾。このフォード自動車に象徴される二十世紀初頭の 대중社会の姿、そしてファシズム政権の台頭と崩壊、第二次大戦を経て、新たな世紀の初頭たる今日までの時代像をハイライトし顕現させるものとして読まれることをこの物語は欲している。

2 知の中央集権、録音・再生としての教育

この物語の社会では徹底して中央集権的な知の掌握がなされている。知識は世界総統たちが管理し、一般の国民の間で自由に流通することはない。とくに世の中の仕組みを全体的に把握しようとする知識が強く制限されていることに注目しよう。子供を人工育成する人工孵化・条件反射育成所の所長はつぎのように語る。

一般的理解 (general idea) はできるだけ最小限にとどめておくべきだ。それは誰もが知るように、専門的知識 (oarticulars) は徳と幸福を増進するが、全般的知識は知的な意味での必要悪なのだから。そもそも社会の背骨^{バックボーン}をなすのは哲人ではなくして、糸鋸師や切手蒐集家なのである。(2 [八])

社会の背骨が職人や趣味人ならば、大脳は哲人である。世界総統ムスタファ・モンドは、まさに世の中をトータルに把握する知識を体現し、独自の世界観をもつ哲人である。これは、むろん、プラトンの『国家』篇が念頭に置かれた記述である¹⁰⁾。そして、文学や芸術もまた世界をトータルにとらえようとする人類の営みであり続けてきたものであり、この未来社会では禁止されている。シェイクスピアは禁書である。だが、もちろん、世界総統はそれを読んでいいる。われわれの生きる世界でも、教育の主眼はしばしば、効率よく専門職能の担い手 (プロフェッショナル) を生産することに置かれる。いわゆる道具的理性こそが社会の維持に不可欠のものだ。そして言うまでもなく、社会の支配者が単なる道具的理性の所有者であることは決してない。

教育、つまり知の伝達・再生産がこの未来世界で

どのように営まれているかを見てみよう¹¹⁾。この社会には、今日われわれが想像するような意味での教育はなく、学問は存在しない。教育に相当するものは眠っているときに音声メッセージを反復して聞かせる睡眠時学習と条件反射の刷り込みである。能動的に学ぶ過程がなく、子供たちがあたかも録音媒体のように言葉を吹き込まれるさまは、教育というよりはむしろ洗脳のイメージに近い¹²⁾。理屈抜きの言葉の反復を聞かされつづけて子供たちは育つ。やがてその言葉は自然にかれらの口をついて出るようになる。何事かの当為を判断するような場面で、かれらは理性を行使することなく、ただ記憶している道徳教育の寸言を反復するだけである。いわば言葉が自動症 (automatism) としてしか作動しなくなる。なにかを考えて発語しているつもりでも、それは睡眠時学習の言葉をなぞっているにすぎない。

3 生理学的快樂原則——欲望の予定調和

判断—発語のみならず、人が何かを望むこと、つまり欲望の過程も統御の対象となる。人は何かを語っているつもりでいても、単に反復学習で叩き込まれた言葉をなぞっているにすぎないのと同様、何かを心地よいもの・自身に益するものとして望むとき、それはかれが望んでいるのではなく、かれは望まされている——それを望むように条件づけられている——のである。たとえば、熱帯で労働する人手として育成される者は「暑さで勢いづくよう条件づける」(12 [二二])。また、エプシロン階級の者は、書物になど興味をしめさずひたすら奴隷のように労働することが期待されており、幼い頃、書物を手にとろうとすると電気ショックを与えられるといった条件付けがなされる¹³⁾。「赤ん坊たちは書物や花に対して、心理学者のいわゆる『本能的』嫌悪をもって生長してゆく。永久不変的に植え付けられた条件反射運動だ。かれらは書物や植物からは生涯安全に守られることだろう」(17 [二八])。「自分がなさねばならぬことを好むということ。すべての条件反射訓練が目的とするのはまさにこれだ。人々をしてその逃れがたい社会的宿命を愛するようにさせること」こそが、この社会の教育なのである。

ここではフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) のいわゆる快樂原則は社会的かつ生理 (学) 的に、或る設計意志を具現するかたちで構造化される¹⁴⁾。

この意味するところは、なんとも空恐ろしい。すなわち、人は、それが物理的に耐えることであれば、どんなに「辛い」ことがらでも「快」として (少なくとも不快ではないものとして) 受け取ることができるようになる。より正確には、「辛い」という事態そのものが、物理的な所与とその主体との間で構成的に成立する属性にすぎないのであり、何が「辛い」かは主体の側をいかように調整するか (条件付けるか) 次第でどうにでもなるということである。猛暑のなかを嬉々として労役に励む奴隷。かれはいささかも「辛くない」。みずからのアイデンティティも操作的に構成される。睡眠時学習の音声は何度も何度も語りかける。

「……みんな緑の服を着ている」と、静かだが非常にはっきりした声が文章の途中から語りはじめた。「そしてデルタの子供たちはカーキ色の服を着ている。ああ、嫌だ。デルタの子供なんかと遊びたくない。それにエプシロンときたらもっとひどい。ベータに生まれてきて、ほんとはよかった」(22 [三四])

「アルファの子供たちは灰色の服を着ている。かれらはひどく利口なので、われわれよりずっと猛烈に勉強する。自分はベータに生まれてきてとてもよかった、だってそれほど勉強せずにはすむのだから。それにまた、われわれのほうが、ガンマやデルタよりはずっといい。ガンマは馬鹿だ。かれらはみな緑の服を着ている。そしてデルタの子供たちはカーキ色の服を着ている。ああ、いやだ。デルタの子供たちなんかとは遊びたくない。それにエプシロンときたらもっとひどい。とても馬鹿で……」(22-23 [三四-三五])

この調子で、階級間の対立を強調するような「教育」がなされる¹⁵⁾。

「わたし、エプシロンでなくてよかったと思うわ」とレニーナは確信をもって語った。

「でも、君がエプシロンだったら」とヘンリーは言った。「自分がベータやアルファでなかったことをやはり感謝するように、条件反射教育されていることだろう」(64 [八九])

4 歴史の終わりと動物化

ユートピアは理想^{イデア}の国家であり、完全性の王国¹⁶⁾である。それは完成された世界だ。したがって生成変化する〈歴史〉とは元来相容れない。この「すばらしい新世界」では、歴史の封殺が世界総統によって強権的・系統的に行なわれている。この理想国は、われわれの生きる時代の延長上に起こるとされる「九年戦争」の終戦をまって成立することになっているが、建国に際して有形無形のさまざまな歴史的堆積が徹底して破壊されている。「やがてあの大英博物館大虐殺が行なわれたのだ。二千の教養ファンが硫化ダイクロレチールの毒ガスでやられた」(43 [六二])。「これに続いて〈過去〉の抹殺運動が行なわれ、博物館は閉鎖され、歴史的記念物(幸いにも九年戦争の間にその大部分が破壊されていたが)が爆破され、フォード紀元百五十年より前に発行されたあらゆる書物が弾圧された」(43-44 [六三])

その結果、さきに述べたように、例えばシェイクスピアは禁書となった。

「でも、なぜ禁止されているのでしょうか」とサヴェッジは訊ねた。[……]総統は肩をそびやかした。「それは古いものだからだ。それが何よりの理由だ。ここでは古いものには一切何の用もない」(192-193 [二五三])。

世界総統——彼自身はもちろんシェイクスピアを読んでいる教養人である——は、ただその場限りの幸福感に浸れる娯楽だけを国民にあてがう。国民は「とにかく、可愛いおとなしい動物どもだ」(193 [二五四]、強調引用者)と彼は言う。かくして歴史は消滅する。コジェーヴ(Alexandre Kojève, 1902-1968)が述べるとおり、「みずから歴史を生きそれを意識的に想起しないでは、歴史もまた存在しない¹⁷⁾のである。

歴史を失った世界では人間はどうなるのか。いま引用したムスタファ・モンドの言葉はきわめて示唆的である。そうだ、人々は「動物」になるのだ。コジェーヴを再び参照しよう。彼は欲望^{デジール}(人間的欲望)と欲求^{フゾワン}(動物的必要)を区別する¹⁸⁾。例えば渴きを覚えた動物や人間は水を飲みたがるが、水を飲めば、その欲求(必要)は満たされ解消される。これに対

して人間特有の欲望においては、人がなにかを手に入れようと欲し、それを手中におさめても、決してみたされることがない。人は自らの所有するものを他人に欲望されることを望み、また、人が欲するものは自らの欲望の対象ともなる。つまり欲望は自然的なものではなく文化的なものなのである。間主観的に構成される人間文化のコンテクストに沿って、人は欲望する。そしてこの間主観的な文化とは、「歴史」と呼ばれるものにほかならない。欲望は歴史を形成し、歴史が欲望を規定する。自分の欲望と他人の欲望は互いが互いを形成しあう。欲望は合わせ鏡のようにかぎりなく続く。だが、この未来社会には、そのような欲望の無限の連鎖は存在しない。なぜならば、欲望を文脈づける「歴史」は存在せず、或る人が何を望むか(望まないか)は、すべて条件づけと睡眠時学習によってすべてあらかじめ定められているからである。「手に入らないものはみんな欲しがらない」(193-194 [二五五])し、「当然ふるまわねばならないようにしかふるまえない」(194 [二五五])のである。何に価値をみだし、何を無価値なものとするかは、信念の問題であるが、それもあらかじめ定められている。「人が何かを信じるのは、そう信じるように条件づけられたから」(207 [二七二])である。

5 反復、生命のリズム、死のリズム

動物化し、その場かぎりの刺激-反応を生きるようになった人間は、知的な活動で得られる充実感や芸術を味わう喜びといった繊細な——つまり迂遠な——快楽では満足できなくなっている。かれららはもっぱら向精神薬が脳に直接働きかける暴力的な快楽をむさぼるようになる。かれらが用いるのはソーマと呼ばれる「副作用のない」ドラッグである。「君に必要なのはソーマの—グラムだね」(46 [六七])。かれらはしばしば集団でこのドラッグを服用し、陶酔感を楽しむマリファナ・パーティーのような集まりをもつ。自己の輪郭を失う、トランスパーソナルな一体感に酔いしれるためである¹⁹⁾。「男、女、男と無限に交代しながらテーブルのまわりに輪をつくっていた十二人の人間がまさに一人になろうとしている」(69 [九五])。フォード方式で量産され、恋愛や濃密な人間関係から疎外された人々は、個性性を失い一体化することで、一種官能的ともいえる根原的

な喜びに身を委ねる。失われた愛にかわって、かれらは薬理的なファシズムに陶酔するのだ。そこにはしばしば、規則正しく反復して打ち鳴らされる太鼓のリズムが響く。「レニーナはその太鼓が気に入った。両目をとじて彼女は、その太鼓の柔らかな反復される音に聞き惚れていた。[…]やがて、この世の一切はかき消えて、その深い音の鼓動だけになった」(97[一三二])。原始社会の祝祭を思わせる、集団の融合と打楽器の音の反復。それはわれわれの生命の古層にある「動物」的な生命、原始的な生命を鼓舞する²⁰⁾。

反復し、打ち鳴らすこと。このテーマは、この社会への反逆者・サヴェッジが死に追いやられる場面にあられる。物語のラスト、サヴェッジは群衆に取り囲まれている。かれらはサヴェッジに、自らの体を鞭打つ芸をみせろと迫る。

[…]声をそろえ、ゆっくりとした重々しいリズムに乗せて、列の端にいた一団が叫んだ。「鞭打ち——を——見せろ。鞭打ち——を——見せろ」

ほかの連中もその叫びに和して、この文句がオウムのように何度も何度も繰り返され、次第に大勢の声になっていって、七、八回繰り返されるころには、それ以外の言葉は何も口にされなくなった。「鞭打ち——を——見せろ」

かれらはみな一緒になって叫んだ。そして異口同音の叫び、リズムカルな一致協和の感じにつられて、何時間でも——ほとんど無限に叫び続けるかと思われた。(226 [二九六])

サヴェッジの前に一人の若い女が進みでて、ほほえみながら手をさしだす。彼女は何かを言っているが群衆の叫びにかき消されて聞き取れない。サヴェッジは狂乱し女を鞭打つ。「苦しめこの色情狂！」(228 [二九八])。そして今度は自らを鞭打ちはじめる。「これを殺すのだ！」。やがて暴徒化した群衆は「苦痛の恐怖に惹き付けられ、条件反射教育が抜きがたく植え付けた協力への習性、共同一致への欲求に内部から駆り立てられて、[…]その狂気のような動作を物真似しはじめ、お互いになぐり合い出した。「誰かが『ジャカジャカ、ドンドン』と歌いだし、たちまちみなはその繰り返しに和して、歌いながら踊りだしていた」(228[二九八])。ジャカジャ

カ、ドンドン、ジャカジャカ、ドンドン……。この「融合の光景」が繰り返された翌日、縊死しているサヴェッジが発見される。ぶらさがって回転するサヴェッジの骸。

ゆっくり、とてもゆっくり、のろのろとした羅針盤の二本の針のように、その足は右に回転した。北、北東、東、南東、南、南南西。そこで停止して、また数秒後にはやはり同じようにゆっくりと左の方に逆まわりを始めた。南南西、南、南東、東… (229 [二九九])

右まわり、左まわりを反復する反逆者の亡骸。死の反復のなかで、物語は幕を下ろす。

6 逸脱する生命、横溢する生権力

さて、以上を総括してみよう。

二つの問いをたてる。

第一に、この未来社会はユートピアなのかディストピアなのか。言い換えれば、この作品のタイトル『すばらしい新世界』はイロニーであるのか否か。われわれはこの「すばらしい (Brave)」という形容詞はイロニー以外の何ものでもなく、実際には「おぞましい」新世界であると感じる。だが、この実感は正しいのだろうか²¹⁾。

われわれにおぞましきを与えるのは、この社会では、権力が生命科学的な知識をもちいて、人々の行動を「操作」し、人々の欲望をも支配していることだろう。いわば神である世界総統の箱庭のなかで人々が傀儡のごとく操られているような無気味さを覚えるわけだ。だが、操作とはほんとうにおぞましいものなのか。この社会の人々には、基本的に、苦しみはないのである。いかに厭わしい労働に従事しようとも、かれは物心つかないうちに条件反射と催眠教育によって何かを好み何かを嫌うようプログラムされている。かれはその仕事を「好んで」おこなっている。そのことでかれはいささかも苦しまないし、かれ以外に苦しむ者もない。ここでハックスリーの着想源ともなっている行動主義心理学の代表的学者スキナーの言葉を聴こう。彼は、「神」とは有効性の最も高い統御装置として人を操作するものとみなし、次のような内容のことを述べている。「もし自動車にのっている人が警官が目に入る場合にだ

けスピード規制に従うとすれば、レーダーでスピードを監視するようになる。すると今度は運転者はレーダー感知装置をつけるかもしれない。すべての市民をスパイに変えてしまう国家、あるいは全てを監視している神という概念を作り上げる宗教は、懲罰を加えるものからの逃避を不可能にする。[...]自由を祭り上げる人々はあらゆる統制が好ましくないと盛んに喧伝してきた。だが彼らにはなんら嫌悪的性格をもたない統制もあるという事実がわかっていない。人類の福祉に欠くことのできない多くの社会的実践は、ある人物による他の人たちの統制という契機を含んでいる」²²⁾。また、オルガス・ハックスリーの祖父トマス・ヘンリー・ハックスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) は次のような内容の言葉を残している。「もし何らかの偉大な力が私を一種の時計にして、毎朝起床の前にネジをまいていつも真実のことだけを考えさせ、正しいことだけを行なわせることに同意するなら、私はすぐにその提案に応ずるだろう」²³⁾。こうした主張に対しては、その統制者の倫理性が必ずしも保証されないと反論することができる。だが、繰り返すが、条件反射や睡眠時学習によって感情そのものを統制された者にとって、かれの一人称で考えるかぎり、かれはなんら苦痛を感じない。このことはその統制者の意図が倫理的であろうとなかろうとかわりないのである。やはり、この感情に先手を打つような「すばらしい新世界」式の行動調整を全面的に悪だと言い切るのは、ことのほか容易ではないようである。悪であると言いきれないところにこそ、限りないおぞましさをわれわれは感じ取ってしまうのである。

二つ目の問いに移ろう。

すなわち、このような未来社会は実現可能か。実現するためには、結局のところ、欲望や人間の属性に対する操作が確実に行なわれること、すなわちそれらが決定論で記述しうるものとなっていることが必要条件になる。人は世界総統の望むとおりに欲望するか。そして、世界総統の望むとおりの性質を人は保ち続けるか。つまり、第一の問いとも大きく重なるが、「欲望—充足の予定調和」「設計意志の具現」にどこまで従順でありうるか、あるいはそこからどこまで逸脱しうるか、という問題である。これは、よりラディカルな水準では、自由論と決定論という哲学上の大問題ともかかわる。欲望充足の問題はさきにかなり論じたので——いぜん解決はしていない

が——これ以上の模索はやめて、後者の設計意志の問題を考えよう。つまり生殖が生命科学的にコントロールされる社会で、「望むままにつくられた」或る人物は、その（世界総統が）望む属性にどれほど拘束されるか、あるいはその属性からどこまで逃れられるか、ということである。強い遺伝的決定論をとるならば、その属性からの逸脱は困難ということになる。生命に関する決定論として科学思想史上で重要なのは言うまでもなくクロード・ベルナル (Claude Bernard, 1813-1878) のデテルミニズム (le déterminisme) である。これを受けて自然主義の作家エミール・ゾラ (Émile-Édouard-Charles-Antoine Zola, 1840-1902) が書いた《ルーゴン・マッカール叢書》は遺伝的決定論をめぐる壮大な文学的実験であった。たとえば、この叢書の一部をなす作品『居酒屋』(L'Assommoir, 1877) では、先祖から受け継ぐ生得的・遺伝的な資質によりアルコール依存症に陥る男が描かれる。ベルナル／ゾラにおいて、遺伝的要因は決定的であり、そこから逃れることは難しい²⁴⁾。だが、生命とはつねに認識を逸脱し、遺伝的決定論によって記述しきれないものではあるまいか²⁵⁾。ハックスリーに先立つこと二十年あまり前、ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) は『創造的進化』(L'Évolution créatrice, 1907)のなかで、この生命特有の予測不可能な衝動をエラン・ヴィタル (l'élan vital、生命のはずみ) と呼んだ²⁶⁾。むしろ、これは実証的な概念ではないが、この立場をとるなら、生命はどのような外因によりコントロールされても、不意に或る逸脱を示すものとなる。生命のリズムはサヴェッジを死に追いやったような閉じた振幅と単調な周期をもつばかりではない。予測できない周期で、大小の幅に不規則に振れる進化と創造の律動ともなる²⁷⁾。だからムスタファ・モンドがいかにか手をつくして従順な国民を製造しようとも、新たな反逆者が、こんどは人工孵化施設のガラス塚のなかから生まれてこないとは言いきれない。生命を内に含む系 (すなわち、社会) を完全な決定論によって飼いならすことは不可能なのである。したがって人間をトータルに決定論の支配下に置くことを前提としたこの「理想国」は成立しないということになるだろう。だが、はたして事態はそれほど単純だろうか。むしろ、次のように考えることはできないか。この生命科学的な条件付けは、設計から逸脱するサヴェッジのような存在をもあらかじめ想定してい

る。すなわち、生命の特性たる〈予測不可能な衝動〉をも含み込んでおり、それを言わば確率的に織り込み済みで「設計」している。だからこの物語の世界は、逸脱者を含む形で、社会の全体が管理されるとみることでもできる。このようにみるとき、「すばらしい新世界」は逸脱や反秩序を含む人口 (population) を総体として管理する、生権力 (bio-pouvoir) 的な社会として現われる²⁸⁾。したがって、サヴェッジのような存在は、人口の一部として、むしろ統治の上で有益でさえあり、逸脱者はこの管理社会を突き崩す希望とは必ずしもならない。実際、サヴェッジはこの物語世界において、有効な叛乱者たりうることではなく、死を迎えている。とはいえ、少数の逸脱者の存在という形以外で、この「すばらしい」世界の成立を阻む方法はあるのだろうか。やはりこれも答えを出すのは難しい。そして、この物語世界が〈生権力〉的にコントロールされた社会だとすれば、この権力の成分には、生命が内在している。生命という、認識を逸脱する項を含んでいるため、やはり確実な判断はできなくなる。ここでは、さきに参照した東浩紀がこの作品を現実社会の問題に引き寄せて、次のように指摘していることを引用しておこう。「管理社会の悪夢を到来させるのは、イデオロギーではなく、消費社会を駆動する大衆の動物的欲求そのものであることをハックスリーはよく分かっていた。彼が知らなかったのは、ただ、その大規模な欲望の管理が、生化学的に行われる必要がなく、広告やマーケティングの充実によって記号的あるいは社会的にかなりのていど実現可能だということだけである。私たちは、いま、世界中でコココーラを飲み、マクドナルドを利用し、ディズニーアニメを楽しみ、マイクロソフトのOSを起動しているが、この画一的な市場は何も薬物や洗脳によって実現したものではない。商品と快樂のあいだの条件反射は、とくに実験室を意図しなくとも、消費社会のなかで十分に鍛えあげることが可能なのだ²⁹⁾。東の主張によれば、「すばらしい新世界」は、なかば現実化しているのである。しかも、『すばらしい新世界』のように、生命科学的条件付けによって欲望が管理されるよりも、よりスマートな形でそれが行なわれているところに、ハックスリーが描いた未来社会以上のおぞましさをわれわれの社会は示しているのかもしれない。ただ、このような欲望管理社会が実現し(かけ)ているということと、それを脱臼させようような希

望が皆無だということは別問題である。もっとも東にしても、この問題に明確な答えを示しているわけではない。[「…」目の前の幸せを追求する動物的な生を選ぶことのどこがいけないのかといえば、これは難しい問題である。それは、哲学や社会学よりむしろ宗教や倫理学にふさわしい問いかけであり、それに答えることは本論の範囲を超えている³⁰⁾。

結局二つの問は明確な答を出されることなく、宙吊りのまま残されることになった。われわれはサヴェッジの骸のように肯定、懐疑、再考、否定、疑義……疑義、否定、再考、懐疑、肯定……と、救いのない反復を続けるのである。

謝辞

本稿執筆にあたって、かつて慶應義塾大学理工学部の高桑和巳教授との間でなされた議論から大きな示唆を得ました。また、本論攷の草稿に対して、東京大学大学院教育学研究科博士課程の稲田祐貴氏より貴重なご意見をいただきました。両氏に心より御礼を申し上げます。

註

- 1) Shakespeare, *The Tempest*, Act V, Scene I. 本稿で論ずる『すばらしい新世界』のタイトルは、このミランダの科白に由来する。
- 2) 参照したテキストはAldous Huxley, *Brave New World*, London, Vintage, 2004である。訳文は松村達雄訳『すばらしい新世界』(講談社文庫、一九七四年)に或る程度依拠したが、かなり改変した部分もある。引用箇所は引用文の末尾に、(原書頁数[訳書頁数])として示す。
- 3) この人工授精のアイデアには、J. B. S. ホールデン (John Burdon Sanderson Haldane, 1892-1964) の影響が明白である。Cf. J. B. S. Haldane, *Daedalus or Science and the Future*, New York, E. P. Dutton, 1924, p. 64. このなかでホールデンは体外発生 of アイディアをまさにectogenesisという言葉で呼んでいる。ホールデンとオルガス・ハックスリーは親友であった。
- 4) これはワトソン (John Watson, 1878-1959)、ハル (Clark Hull, 1884-1952)、スキナー (Burrhus Skinner, 1904-1990) らの行動主義心理学をふまえた記述である。ちなみに本作に登場する人物で、ヘルムホルツ・ワ

- トソン (Helmholtz Watson) というジャーナリストがいるが、この名はドイツの生理学者・物理学者ヘルムホルツ (Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821-1894) と上記ワトソンに由来すると考えられる。
- 5) バーナード・マルクス (Bernard Marx) の名は社会進化論や優生学にも共感を示していた劇作家バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) あるいは生物学的決定論^{デテルミニズム}で知られる生理学者クロード・ベルナル (Claude Bernard, 1813-1878) とカール・マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818-1883) を合わせたもの、レニーナ・クラウンはレーニン (Vladimir Ilyich Lenin, 1870-1924) を女性形にし王冠 (crown) を冠したものの、ムスタファ・モンドはトルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルク (Mustafa Kemal Atatürk, 1881-1938) に〈世界〉を意味するモンド (仏語 *le monde*) を合わせたものと読むことができる。
 - 6) このような理想的空間はヨーロッパでは伝統的に悦楽境 (*locus amoenus*) と呼ばれてきたもので、しばしば風景画の主題となるが、その文学的形象については、クルツイウス (南大路振一・中村善也・岸本通夫訳) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』、みすず書房、一九七一年、第一〇章第六節を参照。
 - 7) オルダス・ハックスリーは科学技術への関心を一貫して持ち続けていた。彼の家系は祖父 T. H. ハックスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-95)、同じく兄ジュリアン・ハックスリー (Julian Sorell Huxley, 1887-1975) など科学者を輩出しており、オルダス自身も——のち疾病により断念するが——当初は科学者を志していた。科学に関する著作 (*Science, Liberty and Peace*, 1946ほか) もあり、最晩年の一九六三年にはストックホルムの世界科学アカデミーで綱領起草に参加している。
 - 8) 本書は一九三二年に刊行されている。いうまでもなく全体主義の台頭期とほぼ重なるが、この時期は、別の見方をすれば、地上に〈ユートピア〉が次々と実現した時期でもある。一九三二年の主な出来事としては、まず満洲国の成立 (これもまた一種のユートピア構想が実現しディストピアを産んだ例であろう) があげられる。そして翌年にはヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) が政権を掌握 (第三帝国というユートピア=ディストピア)、さらに三四年は、これも実現した理想国家であるソヴィエトがスターリン (Joseph Vissarionovich Stalin, 1878-1953) の大粛清によりディストピア化した年である。また、本書の執筆時期とおよそ重なるであろう一九三〇年は、オルテガ (José Ortega y Gasset, 1883-1955) が『大衆の反逆』 (*La rebelión de las masas*, 1930) を発表し、近代大衆社会批判——彼が想定する「大衆」の原型とは技術者の科学者である——に先鞭をつけてた年であることも確認しておこう。
 - 9) 伊藤俊太郎ほか編『科学史技術史事典』、縮刷版、弘文堂、一九九四年、四三四頁。
 - 10) プラトン『国家』篇のユートピア思想としての意義については、次の二書を参照。佐々木毅『プラトンの呪縛』、講談社、一九九八年。納富信留『プラトン 理想国の現在』、慶應義塾大学出版会、二〇一二年。
 - 11) ハックスリーが教育について論じた文章をまとめた論集として横山貞子訳『ハックスリーの教育論』 (人文書院、一九八六年) がある。
 - 12) だが、これに近いことは、たとえば現代の日本でも行なわれている。思考よりも身体的かつ反復的な鍛錬が知性の形成に与すると主張する教育論が、二〇〇〇年代に、目だって主張された (たとえば、教育学者・齋藤孝、脳神経医学者・川島隆太らの一連の著作を参照)。いわゆる「ゆとり教育」 (二〇〇二年度から施行された学習指導要領に基づく学校教育) が学力低下をもたらしたとして、その〈知性の減衰〉への処方箋を、たとえば文学や哲学や科学といった人類文化の産物に広く接するうちに複層的に形成される人間現象への感性や自然現象への感受性を育てようと抽象的・概念的な思考を鍛錬しようといった方向に求めるのではなく、音読、四則計算、漢字ドリルといった単純作業のリトミックな反復が少なくとも大衆の水準では——しばしば現実の政策提言や公教育の現場でさえ——「頭がよくなる」ものとして重視された近過去の出来事を、或る寝覚めの悪さとともに筆者は思いだす。
 - 13) これは行動主義心理学でオペラント条件づけ (*operant conditioning*) と呼ばれる機構である。
 - 14) ラカン (Jacques-Marie Lacan, 1901-1981) の精神分析理論では快楽原則の社会的構成は自明である。ここでは、それが強い設計意志によって、オペラント条件付けなどで暴力的に傾向づけられたことを述べている。
 - 15) ここで宗教団体オウム真理教 (現・アーレフ) の教祖がテープに吹き込んで信者たちに繰り返し聞かせていたマントラ (真言) を思い出すのは筆者だけではあるまい。要するにマインド・コントロールなのである。
 - 16) Krishan Kumar, *Utopianism*, Milton Keynes [Pa.], Open University Press, 1991. クマー (菊池理夫・有賀誠訳) 『ユートピアニズム』、昭和堂、一九九三年、一

二六頁。

- 17) Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel, Leçons sur la phénoménologie de l'esprit, professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes-Études*, Paris, Gallimard, 1947. コジエーフ (上妻精・今野雅方訳) 『ヘーゲル読解入門』、国文社、一九八七年、三一六頁。
- 18) 欲望 (le désir) と欲求 (le besoin) はラカンの用語に対応している。コジエーフの用語法をこのように読み替えたのは、次の文献の示唆による。東浩紀『動物化するポストモダン』、講談社現代新書、二〇〇一年、一二六頁、一八三頁。むろん、例えばハッキングの示唆に富んだ指摘 (Ian Hacking, *The Social Construction of What?*, Cambridge [Mass.], Harvard UP, 1999) を俟つまでもなく、人間現象において生物学的／社会構成的の区別は容易ではない。
- 19) 米国西海岸を中心とする一九七〇年代のニューエイジ・サイエンスの一部をなすトランスパーソナル心理学のセラピーでこのような手法が多用されていた。ウィルバー『無境界』(Ken Wilber, *No Boundary*, Boulder [Colo.], Shambhala, 1979. 吉福伸逸訳、平河出版社、一九八六年)などを参照。なお、この個の融合のテーマは、SF的作品に散見される。例えば、A. C. クラーク『幼年期の終わり』(Arthur C. Clarke, *Childhood's End*, 1953. 福島正実訳、ハヤカワ文庫、一九七九年)、ステーブルドン (Olaf Stapledon, 1886-1950) の諸作品、またカトリックの思想家テイヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chardin, 1881-1955) の宇宙進化論の最終段階における人類の姿とも重なる。また進化の極限とは逆に、生命の始原、すなわち〈黄金時代〉における融合——あるいは自他未分——のテーマはプラトン『饗宴』やバタイユ『エロティシズム』(Georges Bataille, *L'érotisme*, 1957. 澁澤龍彦訳、二見書房、一九七三年)にもみられる。
- 20) 神話学者ケレーニイ (Karl Kerényi, 1897-1973) が大冊『ディオニューソス』(*Dionysos: Urbild des unzerstörbaren Lebens*, München, Langen-Müller, 1976. 岡田素之訳、白水社、一九九三年)で分析するところでは、ギリシア語には生命をあらわす言葉が二つあった。ひとつはゾーエー (zoe) で、これは動物の持っている生命、つまり、単に生きているという状態のことである (zoologyの語源)。心臓が鼓動しているとか、呼吸している、空腹を覚え何かを食べるといった営みを支える生命がゾーエーである。そしてこれはあらゆる動物(人間を含む)が分有する、個の分化以前の生命である。こ
- こで原初的な生命と述べたのはこのゾーエーのことである。もうひとつの生命はビオス (bios) で、これは人間のひとりひとりに属する、個人の生活史と一体になったものである (biographyの語源)。複数の人間が祝祭の狂乱のなかで一体感を感じるのはゾーエーを介してである。したがって祝祭と酒の神ディオニューソスはゾーエーの化身とされる。なお、ゾーエー／ビオスの概念対は近来ではアガンベン (Giorgio Agamben, 1942-) が『ホモ・サケル』のなかで用いている。「ゾーエーはあらゆる生きた存在に共通の、生きているという単なる事実を指し、ビオスは或る個体や或るグループに固有の生きているあり方や方法を示す」(*Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita*, Torino, Einaudi, 1995, p. 5. Cf. 高桑和巳訳、以文社、二〇〇三年)。
- 21) ハックスリー自身は、この物語の描くような未来社会について、どう考えていたか。たとえば睡眠時学習と条件反射の刷り込みのような教育について、彼はあくまで悪夢的未来像として描いたのか、それとも、あるべき教育手段として捉えていたのか。本稿の目的は『すばらしい新世界』というフィクションに対する一つの読みを示すことであるから、ハックスリー自身の判断について彼の全テキスト群をコーパスとして調査し、検討することは行なわない。さしあたり、前掲『ハックスリーの教育論』に掲載された論文の範囲でみるならば、「両生類の教育」("The Education of an Amphibian") という文章 (A. Huxley, *Adonis and the Alphabet*, London, Chatto & Windus, 1956より) のなかで、言語に依存する教育にかえて、心身の器官の訓練を重視した教育法、あるいは〈瞬間露出器〉という一瞬だけ画像を表示するスライド投影装置による教育法を紹介し、これらに肯定的な評価をしている(一四三—一八一頁)。これは『すばらしい新世界』作中の刷り込み的な教育法に通じるところがあると言えるだろう。
- 22) Burrhus Skinner, *Beyond Freedom and Dignity*, Harmondsworth, Penguin Books, 1971. スキナー (波多野進・加藤秀俊訳) 『自由への挑戦』、番町書房、一九七二年、八七頁。
- 23) 同書、八五頁。
- 24) 遺伝の支配への反逆のテーマは、これも遺伝工学的なユートピア=ディストピアを描いた作品である、アンドリュー・ニコル (Andrew Niccol, 1964-) 監督の映画『ガタカ』(*Gattaca*, 1997) で中心的に扱われる。
- 25) このような言明は生氣論 (vitalism) であるという批判

を受けるかもしれない。だが思想的な立場として生氣論で何が問題なのだろう。否、科学の枠内でも、生氣論は、生命に特有の原理を措定する非実証的で非科学的な態度とは限らず、むしろ、生命は物理・化学の文法と語彙で全て記述しようというそれこそ実証されていない信念に留保を示し、生命をいまだ認識されざる領域として確保した科学的な謙虚さの表明とみなすこともできよう。以下の文献を参照。川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』上巻、岩波書店、一九七七年、四六〇頁。カンギレム『生命の認識』(Georges Canguilhem, *La connaissance de la vie*, Paris, J.Vrin, 1965. 杉山吉弘訳、法政大学出版局、二〇〇二年)。

- 26) ベルクソン(真方敬道訳)『創造的進化』、岩波文庫、一九七九年、二九七頁以下。
- 27) リズムと生命については以下の文献を参照。Mark Antliff, *Inventing Bergson*, Princeton [NJ], Princeton UP, 1992. Mary Ann Gillies, *Henri Bergson and British Modernism*, Montreal, McGill Queens UP, 1996. 武藤浩史「腐敗は再生?—D・H・ロレンス、『リズム』、リズムの時代」、小菅隼人編『身体医文化論III 腐敗と再生』、慶應義塾大学出版会、二〇〇四年所収。

- 28) ミシェル・フーコーによる次の二篇の論攷を参照。Michel Foucault, «La “governmentalité”» («La “gouvernementalité”»); cours du Collège de France, année 1977-1978: «Sécurité, territoire et population», 4^e leçon, 1er février 1978, *Aut-Aut*, n^{os} 167-168, septembre-décembre 1978, pp.12-29. Cf. 石田英敬訳「[[統治性]]」、『ミシェル・フーコー思考集成』、第七巻、筑摩書房、二〇〇〇年所収。「“Omnes et singulatum”: Towards a Criticism of Political Reason» («“Omnes et singulatum”: vers une critique de la raison politique»; trad. P. E. Dauzat; université de Stanford, 10 et 16 octobre 1979), in S.McMurrin, éd., *The Tanner Lectures on Human Values*, tome II, Salt Lake City, University of Utah Press, 1981, pp.223-254. Cf. 北山晴一訳「全体的なものとの個人的なもの」、『ミシェル・フーコー思考集成』、第八巻、筑摩書房、二〇〇一年所収。
- 29) 東浩紀「情報自由論(第一四回)」、『中央公論』、二〇〇三年一〇月号、中央公論社。著者自身の手になるウェブ版にて参照した。<http://www.hajou.org/infoliberalism/14.html> (二〇一五年三月二〇日閲覧、強調引用者)
- 30) 同上。